



研究だより

秋田県立秋田きらり支援学校

No.3 令和7年12月12日発行

■第1回拡大授業研究会から

小学部4・5学年1組 国語科

おはなしのせかいをたのしもう「さるかに合戦」

【単元について】

○単元目標

- 物語に出てくる言葉の響きやリズムを感じ声に出したり、動きを模倣したりする。知
- 物語の大まかな内容が分かり、好きな登場人物や場面を伝え、その場面のせりふを言葉や動作で表現する。思
- 物語に出てくるせりふや場面を言葉や動作で表現することを通して、日常生活の中でも自分から言葉や動作で表現しようとする。学

○国語科の段階や指導内容

- 小学部1、2段階 A「聞くこと、話すこと」 C「読むこと」ア、イ

○単元等の概要

- 物語に親しみ、展開を楽しみながら、自分の好きな登場人物や場面を言葉や動作で表現する。
- 身近な言葉や感情を表す場面が多いため、日常生活の中での習得や動作で表現する姿を目指す。
- 好きな登場人物や場面、嫌いな場面を発声や指差しで選び、その理由を伝えながら、友達や教師と一緒に表現することで、物語を楽しみつつ言葉や動作で思いを伝える姿を目指す。

【児童の単元における期待する姿】

- 物語のおもしろさに気付き、次の展開を楽しみにする姿
- 言葉を繰り返し使うことで、物語に出てくる言葉を活用する姿
- 内言語を増やし、活用しようとする姿



【授業研究会から】

- 本時の目標：物語の中から自分の好きな場面を選び、選んだ理由を簡単に伝える。
- 見取りの場面：教師が好きな場面を問い合わせ、選ぶ場面と理由を答える場面
- 焦点：目標達成に向け、児童が各選択肢を選んだ理由と事実の解釈→授業改善のアイデアを提案

ラベルコミュニケーション

- 選んだ場面だけでは理由の特定が難しいため、その後の演じている様子を踏まえた解釈をした。
- 理由の言葉の意味を理解した上で、選択肢から選んでいるのかという点について意見交換した。

アクティビスニング

- タブレット端末の選択肢「面白い」「楽しい」「やっつけたい」の意味は、理解している児童とそうでない児童がいるのではないかという両方の見取りがあった。

授業者の見解と改善の方向性

- 「猿をやっつけて面白い」などと気持ちと行動がつながっているのではないか。
- 実際に演じることで、「やっぱり楽しかった」という気持ちが、よりつながるのではないか。

→言葉だけでなく、実際の行動に結びつくような授業改善が必要

【指導助言】 秋田県立聴覚支援学校 教育専門監 佐藤操先生

導入場面の子どもの発言を全体に広げた点が良かった。活動の流れが分かるよう、順を追って示す板書が効果的である。動作や音を組み合わせ、意味・言葉・感覚を結びつける工夫が語彙の拡充に有効である。マーク（視覚的な手掛けり）や言葉の代弁を通して、感情や意図を伝える力を育てる。意図的に逆の選択肢を提示し、理解度を確かめる手法も有効である。教師が気持ちを代弁することで、子どもの満足感が高まり内面が広がる。また、思いや行動を代弁し、言語化することで、聴覚的なフィードバックが得られ、言葉の感覚が育つ。日常的に「子どもの代弁」を意識することで、言葉の環境全体が変わる。生活全体を通して、言葉が育つ環境づくりを大切にしたい。



拡大授業研究会「見取り」の成果と課題について ~アンケート結果からの考察~

Ⅱ類型拡大授業研究会で実施された「見取り」に焦点を当てた研修のアンケート結果に基づき、参加者の研修成果、指導への活用状況を考察しました。児童生徒の行動や表出を「事実」と「解釈」に分けて捉える「見取り」の技術を活用しました。今回の研究会を通して、「見取り」の質の向上と、それを授業及び指導改善につなげるプロセスを共有することを目的として実施しました。

<アンケート回答者>研究会参加者 24 名

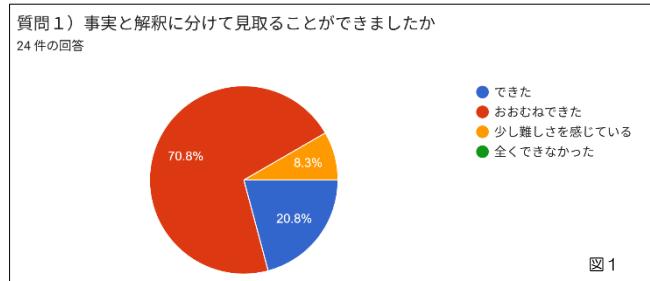
<内容>

研究会で活用した「見取り」(事実と解釈に分けて捉えること)の習得度、自身の授業における「見取り」の実践経験、今後の活用意向、および研究会全体の有意義性や学びに関する意識について調査しました。

<結果と考察>

◆「見取り」に関する研修成果研究会後のアンケート(24件の回答)によると、「事実と解釈に分けて見取ることができましたか」という質問に対し、「できた」が70.8%、「おおむねできた」が20.8%であり、全体の91.6%が目標とする「見取り」をすることができた、あるいは概ねすることができたと回答しました(図1参照)。

また、「研究会を通して、新たな気付きや学びはありましたか」という質問に対しては、91.7%が「あった」と回答しており、本授業研究会が「見取り」に対する参加者の意識と専門性の向上に大きく寄与したことが示唆されます。具体的な学びとして、「事実と解釈の違い」、といった、見取りの概念や日々の授業実践に生かすことの必要性などの気付きが多く挙げられました。また「指導助言者からのアドバイス」からも、学びが得られていました。

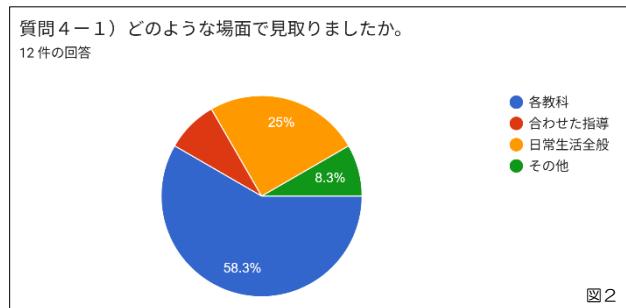


◆指導実践への反映と課題

自身の授業で「見取り」を実践した経験については、「ある」が50%、「ない」が50%という結果でした。

【実践経験者(50%)の状況】

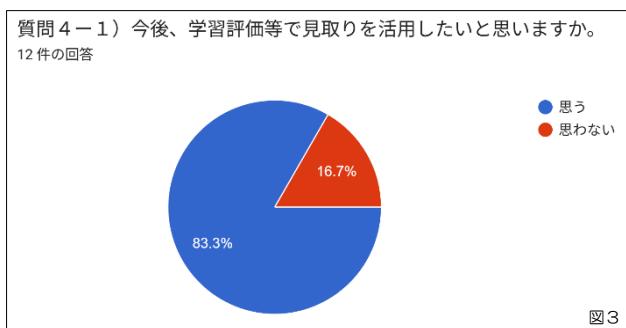
実践内容は、教科指導(58.3%)のほか、「合わせた指導」「日常生活全般」に及んでおり、日常的に「見取り」が活用されていました。実践を通じて、「児童の行動(事実)から、その背景にある心理(解釈)を考察し、指導に生かしている」「算数など、個別指導をしているときに意図したとおりに進まないときに、児童の手の動きや表情などから、つまずきを把握しようとした」といった指導上の具体的な効果が得られていることが挙げされました。



【非実践経験者(50%)の活用意向と課題】

現在実践経験がない教員も、83.3%が「今後、学習評価等で見取りを活用したい」と回答しており、

「見取り」の重要性に対する認識の高さが見られます(図3参照)。活用したい場面として、「気持ちの表出が微細な児童・生徒に対する見取り」や「児童生徒の気持ちを代弁するような場面」が挙げられ、特に児童の心理面や内言語の発達を支援する文脈での活用に高いニーズがあることが分かりました。



一方で、「思わない」と回答した理由として「改まってする時間的余裕があまりないと感じるから」という意見があり、日常の多忙な業務の中で「見取り」を意識的に実践するための時間的・体系的な課題が挙げられました。

＜研究会の持ち方について＞

研究会自体に対する評価は、「有意義であった」が 100%、「意見を出すことができた」が 95.8%と極めて高い評価が得られました。これは、特に「ラベルコミュニケーション」など、参加者が意見を出しやすい形式が効果的に機能したためと考察されます。しかし、今後の検討事項として、以下の点が挙げられています。

► 「解釈の難しさ、ルールの徹底」

「解釈を否定しない」「事実と解釈を分ける」といった基本ルールの事前共有を徹底する必要がある。

▶ 「事前準備の時間確保」

動画提示の遅れなど、時間配分に関する改善の要望があり、研修時間全体の調整が課題となる。

▶ 「見取り場面の絞り込み」

協議の目的に集中できるよう、見取ってほしい特定の場面を明確に切り取る工夫が必要である。

＜まとめ＞

Ⅱ類型拡大授業研究会は、「見取り」の概念や「見取り」を日々の授業実践に生かすためのサイクルを理解し、指導の質を向上させるための新たな視点と気付きが得られました。アンケート回答者の9割以上が研修目標を達成したと答えています。しかしながら、「見取り」を継続的かつ体系的に日々の実践に落とし込むためには、以下の課題が残っています。

★時間的・体系的な制約の克服

「見取り」を日常的な TT 間での情報交換や記録に組み込み、意識的に行うための時間的余裕と、負担の少ない実践様式を開発する必要がある。また、見取った結果が指導改善のフィードバックループとして機能し、児童生徒の学びと成長につながっていく仕組み（サイクル）を確率することが不可欠である。

★専門性の深化

感情や意図の表出が微細な児童への対応など、より複雑な場面での「解釈」の質の向上と、それを指導につなげる具体的な手立てに関する研修を継続的に実施する必要がある。

今後は、これらの課題を解決し、「見取り」が全ての教員にとっての評価・指導手段として定着・活用するよう、ブラッシュアップしていく必要があると考えられます。

 きらり版 見取りのワークショップを行うまでの約束

R7 夏季研修より

★約束|★「事実」と「解釈」を分けて見る

- ・自分の解釈を入れて見ると事実を見取ることが難しい。そのため「事実の把握」と「教師の解釈」を分ける。

【青色の付箋】

言動ラベル

子どもの言動をそのまま記述する

- ・つぶやき
 - ・動き
 - ・視線
 - ・関わり など

【ピンク色の付箋】

解釈ラベル

「なぜそうしたのか」子どもの視線で

推察する

その時の子どもの思いや考えを推察

★約束2★ 互いの考えを尊重、傾聴する

- ・見方考え方は、見た場面やタイミング、年齢や経験等により、一人一人異なる。
相手の考えに耳を傾ける、考えを受け入れる等、相手の意見を批判せず、建設的な話し合いを心掛ける。

★約束3★

- ・子どもの学びを複数の目で見ることで、子どもの実態を捉え直す。
→授業者や参観者の新しい気付きを日々の授業に生かす。